第７回　みなまた地域創生ビジョン研究会議事次第

日　　時：平成２８年１２月１１日（日）１４時００分～１７時３０分
場　　所：水俣環境アカデミア（水俣市南福寺６－１）
議事次第：

１．開会
２．議事
　(1) めざす地域社会像等について・・・資料２
　(2) 第６回の意見の概要報告について・・・資料３
　(3) マッチングポイントにおける交流のねらいについて・・・資料４
　(4) マッチングポイントが機能するための課題及び対応策について・・・資料５
　(5) 新たなイメージ像と情報発信について・・・資料６
　(6) 研究会報告書の骨子案について・・・資料７
　(7) 研究会報告書の素案について・・・資料８
　(8) その他
３．閉会

配付資料：

資料１　委員名簿
資料２　めざす地域社会像等について
資料３　第６回の意見の概要
資料４　マッチングポイントにおける交流のねらい（案）
資料５　マッチングポイントが機能するための課題及び対応策（案）
資料６　新たなイメージ像と情報発信（案）
資料７　研究会報告書骨子（案）
資料８　研究会報告書（素案）

参考資料１　交流の場（マッチングポイント）の参考イメージ

資料１

みなまた地域創生ビジョン研究会　委員名簿

（50 音順、敬称略）

石原　明子　　熊本大学大学院社会文化科学研究科准教授

植木　誠　　早稲田大学パブリックサービス研究所招聘研究員

勢一　智子　　西南学院大学法学部教授

永松　俊雄　　崇城大学教授

深水　陽子　　深水医院副院長

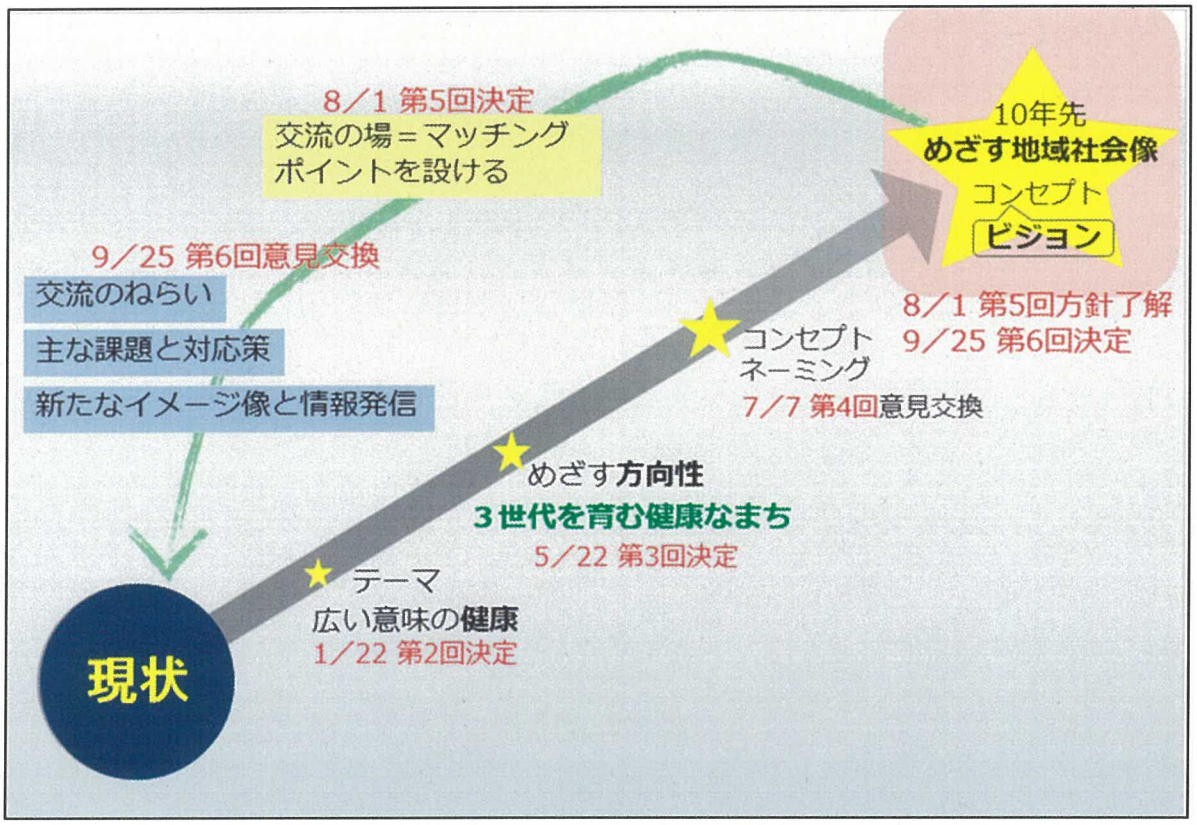
藤本　有希　　一般社団法人ハートリレープロジェクト ファウンダー

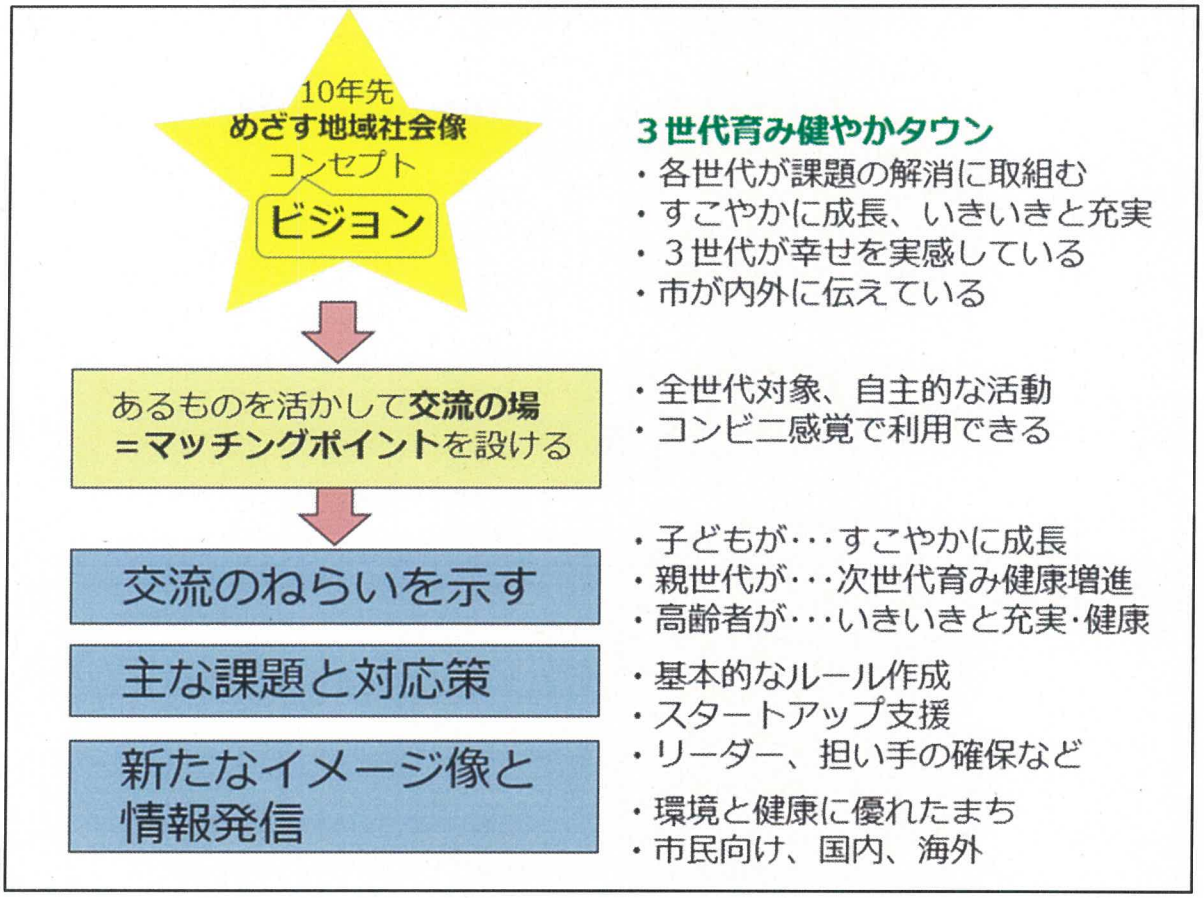
牧迫　飛雄馬　国立長寿医療研究センター老年学・社会科学研究センター
予防老年学研究部健康増進研究室長

松永　裕己　　北九州市立大学大学院マネジメント研究科教授

資料２

めざす地域社会像等について





マッチングポイントのイメージの参考になる事例の紹介

愛知県高浜市における「健康自生地」

【概要】

・高齢者が自ら出かけたくなるような場所や地域の住民と交流できる場所を「健康自生地」として市が認定。平成25年9月開始。現在90か所認定。
・お店の一角にテーブルとイスなど。お店に活気が生まれ、売り上げも向上。
・健康自生地においては、「健康」の定義及び目標は決められていない。

【推進理由（高浜市）】

・高齢者の生きがいづくりや居場所づくりのため。
・自宅に閉じこもりがちになり、生活が単調になると、要介護状態に陥るリスクが高まるため。

【期待される効果】

・適度な運動や交流により、毎日出かける習慣ができる。
・高齢者の引きこもりの防止、認知症の予防、健康年齢の延長。
　→介護保険費の削減が期待される。

【経緯】

・平成23年に市長が、藤原　茂氏（夢のみずうみ村代表）の講話を聴いたことから介護予防への関心が高まり、同年度に調査研究委員会を設置。
・平成24年度には、高齢者ニーズ調査を実施。調査項目は、外出の頻度や目的、趣味や特技、他人に教えたいこと、今後やってみたいことなど。
・同年に、試験的な居場所として20か所を設けている。

【調査研究委員会メンバー】

まちづくり協議会や町内会に所属している市民の方、地元の商工関係者、福祉施設関係者など、総勢40名。

【健康自生地の要件】　※次の5つのうち、2つ以上を満たすこと。

①自ら出かけたくなるような場所
②気軽に参加できる場所
③地域住民と触れ合える場所
④健康や元気を与えてくれる場所
⑤憩いや安らぎを実感できる場所

＊ふらっときて、参加し、交流できることを想定している。
・趣味を楽しむ場
・買い物や食事ができる場
・仲間づくりやおしゃべりができる場
・体を動かして健康づくりができる場　　など。

【健康自生地の運営】
・基本的に受益者負担。高齢者が自主的に行っている。
毎回、100～300 円程度の実費を集め、会場使用料や講師謝金にあてているところが多い。最高でも 1 回 500 円。月会費のところもある。
・健康自生地に対する市の助成金は、備品購入費 3 万円と運営費年間 2 万円（最長 3 年間）。ただし、受給しているのは 6 か所のみ。
・多くの商店や企業が、社会貢献を強く意識しているとのこと。
・健康自生地の担い手は、参加者のなかからでている。
特に多趣味な男性には、担い手になることを促している。
担い手には、1 時間で 50 円分のポイントがつく。
→参加するだけの受け身から、役割や生きがいを得ることができる。

【市の役割】
①情報発信：情報紙『でいで～る』を作成
3 か月に一度、市の広報紙に折込み、全戸に配布。

②インセンティブをあたえる：スタンプラリーとホコタッチ（歩数計）。
・スタンプラリー
健康自生地に行くとスタンプがもらえる。30 個スタンプがたまると応募でき、年 1 回抽選で景品があたる。景品は、すべて協賛の商店や企業からの寄付。
応募者は約 700 名。（高齢者の約 1 割にあたる。）
・ホコタッチ
国立長寿医療研究センターと花王が協力して配布している、歩数計。
健康自生地で読み取り機にタッチすると、健康に関するデータが収集され、本人も数値で健康状態を知ることができる。こうしたデータを検証し、認知症の予防に効果的な活動内容を分析することが目指されている。

【その他】
・川や公園は、スタンプを押す人がいないため、健康自生地にはなっていない。
・今後は、高齢者が歩いて数か所利用できるように、健康自生地を増やしていく予定とのこと。

資料３

第6回の意見の概要

１．マッチングポイントでの交流の目標（前回資料５）について

【永松座長】
・思い出というのは体験の後に出てくる。
・一般的に目標と言われると、目標を達成したかどうかを指標ではかることになる。
・それぞれの内容に生活シーンが入るようにバランスを考えて修文する。

【石原委員】
・目標の根拠や考え方の道筋を示していただけるといい。
・「愛情」や「信頼感」「やさしさ」は、どこから出てきた言葉なのか。健康診断や保健指導とは次元が違う。
・「目標」に替わる言葉として、「機能」はどうか。ビジョンがあって、それに対する目標、それを実現化するための機能。

【松永委員】
・マッチングポイントにおける世代間交流は前提になっているので、目標にまた「交流」の文言を入れる必要があるのか。
・「育む」というのがキーワードになっていたが、「育む」「健康」「世代間交流」を、どこまでここに表現するのか。

【藤本委員】
・「マッチングポイントでの交流の目標」というタイトル自体が、少しわかりづらい。
・「目標」に替わる言葉として、「ねらい」はどうか。　例）「授業のねらい」。

【勢一委員】

・目標の設定が、ＰＤＣＡサイクルのような使われ方を想定したものと同じでいいのか。

【植木委員】

・マッチングポイントが一番の舞台で、シチズンシップを上げるため、ソーシャルキャピタルをより深くするためのものなので、それが目標なのかどうか、また目標という言葉はちょっと忘れて考えてもいいのかなと思う。

【望月所長】

・子ども世代の部分でも、もう少し「健康」を出してはどうか。子どもの中でも生活習慣病の予備軍なども多いし、逆に子どもがどういうふうに親を引き連れて健康増進を図るかというメリットもあるのではないか。

【古賀所長】（オブザーバーとして参加）

・子どもにとってマッチングポイントは、遊びの場であるべきではないか。
・親の世代では、情報交換の場であるべきではないか。
・高齢者にとっては、生きがい発見の場という整理ができるのではないか。

《　結論　》

・交流の「目標」よりも「ねらい」や「機能」の方がよい。
・子どものところで、「他世代との多くの関わりの中で」は全部にかかるので、一番上に上げるか削除する。
・それぞれの内容に生活シーンが入るように修文する。

２．目標達成のための課題及び対応策（案）（前回資料６）について

①　全体的なことについて

【永松座長】

・マッチングポイントの成功ポイントとは、モデルポイントのことか。

・参加者がその気になるための方策で、中高生に企画段階から入ってもらうことと、高校生や大学生の活躍の場をつくることは、重複している。

・子どもにとっては無邪気に遊ぶ、遊び自体が学びになるのではないか。

【松永委員】

・対応策をどこまで具体的に出すのか。ノウハウを入れ込むのか、大まかな項目で成功のコツみたいなものだけでいいのか、そこのレベル感、具体感を決めたい。

・世代間交流に関する施策が抜けている。高齢者と子どもが集まっただけでは交流は生まれない。交流を促すための仕掛けや仕組みが必要。

【植木委員】

・読み手には、関連性のあったほうが浸透しやすいので、項目の順番を精査してはどうか。

【岩橋室長】

・マニュアル的なものをつくるのは無理だと思うため、コツを例示するレベルになる。

《　結論　》

・「高校生、大学生の活躍の場をつくる」を削除して重複を解消する。

・項目の順番を見直す。

・交流を促すための仕掛けや仕組みも検討する。

② 「みなまた地域の特色を活かす」について

【深水委員】

・湯出地区は、以前から学校ごとの運動会はなく、「湯出小・湯出中・地域合同体育祭」という名目で小学校、中学校、地域で九つぐらいに分かれて開催されている。

【藤本委員】

・以前は、大人たちがみんな集まって、親族以外のおじさん、おばさんが応援してくれるお祭りみたいな雰囲気の運動会だった。「学校を核に」というのも考えられるのではないか。

【石原委員】

・水俣ならではの水俣病の語り部さんたちの活動などは、健康や環境に関する発信だと思うため、そういうものを改めて見直していくのもおもしろいのではないか。

・母親たちの健康増進の活動と水俣病の問題はまるで別ものとして語られているが、それをつなげていく活動があってもいいのではないか。

《 結論 》

・地域独自の取組みの場もマッチングポイントとして活かす。

③　「スタートアップ支援」「必要経費」について

【永松座長】

・最初から補助金を用意すると、補助金目当てになりやすい。
多少時間やお金がかかっても自主的に活動を始め、補助金はその活動が周知された後につくグループの方が長続きする。

・市役所等が行っている様々な試みをブラッシュアップし、既にやっているものとペアリングするのはどうか。

【石原委員】

・いかに継続してお金を回していくのかを視野に入れないと、短期的な予算でのスタートアップ支援は危険ではないか。

・おもしろい仕組みに取り組んでいるところに予算を上げるのではなく、該当するような仕組みややり方を表彰するようなコンセプトはどうか。

【藤本委員】

・ビジネスモデルをどう回すか、どこから収入を得るかというのがポイント。
収入（資源、お金、人材、物を含む）の流れを整理した上でビジネスモデルが成り立つかを確認してスタートさせないといけない。

【岩橋室長】

・今あるものを活かすことを考えているが、やはり先立つものがないといけないという意見もあったので、今回は予算の話を出した。

《　結論　》

・時間やお金がかかっても自主的な活動の方が長続きする。

・補助金など、短期的な予算でのスタートアップ支援は危険。

④　「リーダー、担い手の確保」
「マッチングポイント間の相乗効果を考える」について

【永松座長】
・熊本地震で大勢のボランティアをさばかないといけなかったのだが、最初の時点でスキルを持った人がおらず、うまく回っていないと感じた。
・実在するいろんな団体の活動そのものをマッチングしていき、横につなげていくという視点が必要。

【藤本委員】
・現在水俣では、若いグループや飲食店のグループなどで幾つか動きがある。横に連携できるような仕組みを落とし込みたいのであれば、彼らに企画段階から入ってもらうのがいいのではないか。
・ＯＢ教員だけでなく、それらをアテンドする人が必要。全体をきちんとプロデュースできる人で、その中の支援者の一人として学校の先生という立ち位置もあるのではないか。

【牧迫委員】
・既存のいろんな資源があり、一味加えれば目指すものに近い活動をやっているところがあるが、自分たちの強い意思や思いで始めているので、何かマッチングポイントになってもらうメリットがないと、善意だけでは難しいのではないか。

《　結論　》
・リーダーや担い手として、スキルをもった人、アテンドできる人が必要。
・リーダーや担い手のメリットが必要。

3．研究会報告書骨子案（前回資料７）について

①〈Ⅴ章〉マッチングポイントの参考例について

【勢一委員】

・マッチングポイントを利用した取り組みで水俣市が期待したいのは、『さまざまな形で交流の場を設けることができ、自分たちの身の丈に合ったところで楽しんでもらいながら同時に健康になっていく』ということなのではないか。

→マニュアル化するよりも具体的な先進地の取り組みの参考事例集を紹介していくほうが、マッチングポイントの利用におけるヒントとなり、使い勝手が良いのではないか。

【永松座長】

・事例集を見ることで、このように工夫すれば水俣市でも実現するといった具体的なアイデアが湧いてくるため、価値あるものになると思う。

・事例で一つ節をとって紹介する形式にしてみてはどうか。水俣市でもできそうな取り組みのアイデアを詳しく調べて『地元の人でも少し努力すれば実現できる』や、『活動的なグループでなら実現できる』などさまざまな例示項目を設けてみてはどうか。

【牧迫委員】

・実際に水俣市でこのような活動が増えたらいいといった声があれば、今後のマッチングポイントの在り方のモデルとして挙げてもいいのではないか。

【望月所長】

・一つ章を設けて、事例集のようにするのは非常に大切なことだと思う。

・健康に焦点を当てることの意義というところで、なぜ健康に主眼を置くかについて健康に関するデータ的にサポートできる形にしていきたい。

・章立てについて、「こういう情報を盛り込むべき」や「事例集にすべきである」
といった意見があったら、なるべくたくさん頂きたい。

《　結論　》

・水俣にあるものを活かしてできそうな参考例を入れる。
・先進地の参考事例の紹介を入れる。

②〈Ⅴ章及びⅥ章〉マッチングポイントに絞った方策について

【石原委員】

・マッチングポイントのみの方策を提示しているが、3 世代育み健やかタウンを推進する方策であれば、マッチングポイントに絞った内容にしなくても良いのではないか。

【永松座長】

・マッチングポイントが機能するための方策を次の章で提示しているため、マッチングポイントを中心にして提言する方向でいいのではないか。

《　結論　》

・マッチングポイントを交流の原動力にしているので、マッチングポイントに内容を絞って提言を進めていく。

③〈Ⅴ章及びⅥ章〉の内容重複について

【勢一委員】

・Ⅴ章とⅥ章は、内容が相当重複するのではないか。

【永松座長】

・２つの章で重なる部分がある。

・市や公共機関の役割→市や公共機関に期待することではないか。

【石原委員】

・二つの章の関係性について

Ⅴ章：「３世代育み健やかタウンを推進するための方策」は、マッチングポイントに対しての一般論であり、現在置かれている生活環境の現状分析。

Ⅵ章：「目標を達成するための課題及び対応策」は、マッチングポイントを水俣市に位置づけしていくための今後考えられる課題について記載されているのではないかと汲み取った。

【望月所長】

・マッチングポイントの内容で一つにまとめたほうがすっきりするのかと思う。同じ内容を重複して記載する可能性があるため、再検討したほうがいい。

《　結論　》

・Ⅴ章とⅥ章は、１つの章にして重複部分を解消する。

④〈Ⅵ章〉タイトルの「目標を達成」について

【松永委員】

・目標を達成するための「課題」を挙げるのであれば、その前にきちんと「目標」の項目立てをしたほうが良い。（いきなり課題が出ている）

【永松座長】

・「目標」というと、達成度をどう図るのかという問題点が出てくる。

・マッチングポイントが機能を発揮するための課題としたほうがスムーズに内容が入ってくる。

《　結論　》

・「マッチングポイントが機能するための課題及び対応策」とする。

資料４

マッチングポイントにおける交流のねらい（案）

多くの関わりの中で、「交流のねらい」として次のことを重視する。

○子ども

楽しく遊びながら、地域での実体験や思い出を重ねて、すこやかに成長できるようにすること。

○親世代

子育てや健康について情報交換をしながら、次世代をすこやかに育むとともに、自らの健康を意識するようになり、健康増進にも努めるようにすること。

○高齢者

自らの健康に配慮しつつ、知識や技能、趣味などを活かして居場所や生きがいを発見し、いきいきと充実した日々をおくれるようにすること。

資料５

マッチングポイントが機能するための課題及び対応策（案）

（１）当面の実施にあたり必要なこと

①基本的なルールをつくっておく

→例えば、健康自生地では、高浜市健康自生地認定要綱において、「健康自生地」の定義・認定の要件・申請・書式等が決められている。

→マッチングポイントにおける交流

多世代の自発的な交流により、子どもがすこやかに成長できる場
親世代が健康を意識するようになる場
高齢者がいきいきと充実できる場

→将来的には市民の創意工夫により運営していく。

→認定等の書式

→活動内容の把握方法

②交流のメニューを考えて、モデル的なプログラムを作成する。

→みなまた地域の特色を活かしたマッチングポイントのアイデアをフューチャーセッションで多世代から引き出す。

また、地域の自然財産を活かした遊びを、やったことのある世代から聞き取る。

→あるもの（場・人・しくみ）を活かす。

マッチングポイントの候補として次の場が考えられる。

・遊び場（広場、公園、子どもセンター、保育園、幼稚園など）
・ふれあいの場（デイサービス、地域リビング、本よみ場、茶のみ場、もやい館、ふれあいセンター、愛林館、理美容室、公民館など）
・田舎体験予備校（愛林館、村丸ごと生活博物館など）
・各種イベント（もやい音楽祭、まちゼミなど）
・その他（ごみの分別の場など）
・自主的な会の場（主夫・主婦向けの会、夢語り８コマ劇場）
　→フューチャーセッションでのアイデア

市独自の制度として、すでの「環境マイスター」、村丸ごと生活博物館における「生活学芸員」「生活職人」といった創意工夫がなされているの

で、これらを拡充することも検討する。
　水俣における特色として、老人ホーム＋保育園や、定期健診に来た高齢者＋幼稚園といった場を活かすことが考えられる。

→先進事例を参考にして、いまあるものに何かをつぎたす。

③スタートアップ支援をいかに行うか
→利用者や事業者に分かりやすいモデル的なポイントをつくる。
→健康自生地のように少額でも予算は必要（１か所数万円程度)。
→市は、情報発信とインセンティブを与えることを行う。
例えば、情報紙を作成し、市の広報紙に折込んで全戸に配布する。

④リーダーや担い手をいかに確保するか
→リーダーや担い手は、すでに様々な活動をしている人を活かす。
例えば、OB 教員、生徒会役員、地域活動者、ボランティア等。
→担い手は、参加者のなかからみつける。多趣味な人や特技のある人に、担い手になることを促す。担い手にもポイントなどのメリットを導入する。

⑤すべての参加者がその気になるための方策
→ポイント付与やスタンプ押印
→中高生に企画段階から入ってもらう
→飲食店をはじめている人や各種団体に入ってもらう

⑥特に子どもが参加したくなるものにする
→楽しい、おもしろい

⑦いかに続けるか
→高校や中学校の授業やプロジェクトの一環として行えるようにする。
→高校生が主体的に活動するマッチングポイントを街中に設ける。
→スタンプラリーや歩数計をつけてもらい、マッチングポイントに行くとスタンプがもらえるようにする。30 個スタンプがたまると応募でき、抽選で景品があたるようにする。景品は、すべて協賛の商店や企業からの寄付で集める。

⑧主役の市民を市が後押し
→市には、情報発信とインセンティブを向上させるための予算が必要。

表彰、広報

（２）マッチングポイント間の相乗効果を考える
①○○を巡るコースのようなルートマップを作成する。

資料６

新たなイメージ像と情報発信（案）

１．新たなイメージ像の構築

○これまで「水俣病の水俣」「水俣条約の水俣」といったイメージがある。

○市民が自発的に世代を超えた健康まちづくりを拡充・深化させ、水俣病で疲弊してきた地域に対し、自ら環境と健康の両面に優れたまちとしての歩みを進めているイメージを重ねる。

２．情報発信

○マッチングポイントに向けての情報発信

リーダーや担い手に対し、活動に資する健康や他のマッチングポイントの活動状況の情報等を発信する。

○市民向けの情報発信

マッチングポイントにおける世代間交流の意義・内容について、定期的に情報を発信する。

○国内への情報発信

社会的に健康なまちへの取組みとして、「３世代を育むまち」をめざしていることを発信する。

なお、水銀による環境汚染の経験から、「環境」については、「水銀に関する水俣条約」を踏まえて、引き続き環境に関する取組みを行っていることを発信する。

○海外への情報発信

水俣病の教訓を踏まえて、環境と健康の大切さを世界に発信する。

資料７

研究会報告書骨子（案）

はじめに

１．本研究会の目的
２．検討の経緯
３．いま、みなまた地域の地域創生を議論することの意義

Ⅰ　みなまた地域の創生に向けて「健康」に焦点をあてることの意義

○次世代に引き継がれる健康課題
○「社会的な健康」を含む健康なまちづくりの重要性
○「３世代を育む健康なまち」へ

Ⅱ　みなまた地域の情勢

１．地域における健康課題
○みなまた地域における問題意識
○みなまた地域の課題
２．地域で求められていること
○次世代を育む場としての地域
○未来に向けた市民の声・アイデア

Ⅲ　検討の視点とめざす方向性

１．検討の視点
○複雑化する支援ニーズ
○共に支え合う地域実現の必要性
２．みなまた地域でめざす方向性

Ⅳ　みなまた地域でめざす地域社会像の構築
1．３世代育み健やかタウン
○コンセプト
○ビジョン
2．用語の定義

Ⅴ　３世代育み健やかタウンを推進するための方策
1．マッチングポイントの設定
○マッチングポイントの創出
○マッチングポイントでの交流のねらい
2．マッチングポイントが機能するための課題及び対応策
○当面の実施にあたり必要なこと
○マッチングポイント間の相乗効果の創出

Ⅵ　新たなイメージ像と情報発信
1．新たなイメージ像の構築
2．情報発信

Ⅶ．その他
1．多様性の尊重

あとがき

Ⅷ　資料
1．みなまた地域創生ビジョン研究会関係
2．水俣フューチャーセッションによる市民のアイデア
3．全国の参考事例の紹介
4．参考文献等、その他

資料８

みなまた地域における地域創生のビジョンを求めて

―３世代育み健やかタウン―

平成２９年３月

みなまた地域創生ビジョン研究会

はじめに

本研究会の目的

○ 本研究会は、みなまた地域の地域創生のビジョン（めざす地域社会像の一案）およびその実現方法を策定するために、環境省国立水俣病総合研究センター（以下「国水研」）に 2015 年（平成 27 年）12 月に設置され、以来★回にわたって議論を重ねてきた。

検討の経緯

○ はじめに、水俣市の現状や、水俣・芦北地域における振興計画の経緯について把握した。とくに水俣市では、生活習慣病が顕著にあらわれ、重症化して人工透析を受けている人の割合が国内でも高いなど、健康に関する課題が報告された（第1回）。

○ そこで本研究会では、地域とのつながりや人間関係、生きがいまで広げて、広い意味での「健康」を大くくりのテーマにすることとした（第2回）。

○ 続いて、めざす地域社会像の方向性を、「3世代を育む健康なまち」とし（第3回）、そのコンセプトなどについて議論を行い（第4回）、めざす地域社会像の一案（ビジョン）を描き出し、それを実現させる方針・手段として、3世代交流の場（マッチングポイント）を設けることを決めた（第5回）。

○ さらに、マッチングポイントにおける交流のねらいや、マッチングポイントが機能するための課題と対応策について検討してきた（第6回）。

○ 議論に当たっては、各地で健康増進活動を実施している方々や既存の施策の実施に携わっている方々からのヒアリング及び現地調査を事務局にて行った。

いま、みなまた地域の地域創生を議論することの意義

○ 過疎地域である水俣市では、「環境を軸に街づくりを進めているが、将来の消滅可能性も指摘され、10 年、20 年先の未来の姿がどうあるべきか、市民も交えた議論の場を設けて施策を掘り下げたい」としている。

○ みなまた地域では、いまだに水俣病の影響が続いている一方、地域社会の変化やライフスタイルの多様化が著しい中で、次世代に向けて、長期的・広域的視点ら、地域にあるものを活かして、めざす地域社会像の一案(ビジョン)を描き出し、実現させることが喫緊の重要な課題となっている。

○ 国水研では、みなまた地域の地域創生に貢献するため、2013 年 10 月熊本市と水俣市において「水銀に関する水俣条約」の外交会議が行われたことを踏まえ、2015 年 2 月に「未来思考のまちづくり」について水俣市と協定を締結し、市民との新たな対話の場（フューチャーセッション）を設けて引き出した市民の様々なアイデアを含めて、ローカルな視点から多角的に地域創生の方向性を追求してきた。

○ 本研究会は、みなまた地域において目指す方向性とそれを具現化するための政策内容を検討し提案するために設置されたものであり、今般検討結果を「研究会報告書」としてまとめたものである。

○ 本報告書がみなまた地域の次世代に向けて、「水俣病の水俣」「水俣条約の水俣」に次ぐ新たなイメージの創出に寄与し、地域における身近な生活課題に対応する地域創生のあり方を考えるうえで、貢献することを祈念する。

平成29年3月

みなまた地域創生ビジョン研究会

座長　永松俊雄

目　次

はじめに

１．本研究会の目的

２．検討の経緯

３．いま、みなまた地域の地域創生を議論することの意義

Ⅰ　みなまた地域の創生に向けて「健康」に焦点をあてることの意義

○次世代に引き継がれる健康課題

○「社会的な健康」を含む健康なまちづくりの重要性

○「３世代を育む健康なまち」へ

Ⅱ　みなまた地域の情勢

１．地域における健康課題

○みなまた地域における問題意識

○みなまた地域の課題

２．地域で求められていること

○次世代を育む場としての地域

○未来に向けた市民の声・アイデア

Ⅲ　検討の視点とめざす方向性

１．検討の視点

○複雑化する支援ニーズ

○共に支え合う地域実現の必要性

２．みなまた地域でめざす方向性

Ⅳ　みなまた地域でめざす地域社会像の構築

１．３世代育み健やかタウン

○コンセプト

○ビジョン

２．用語の定義

Ⅴ　３世代育み健やかタウンを推進するための方策

１．マッチングポイントの設定

○マッチングポイントの創出

○マッチングポイントでの交流のねらい

２．マッチングポイントが機能するための課題及び対応策

○当面の実施にあたり必要なこと

○マッチングポイント間の相乗効果の創出

Ⅵ　新たなイメージ像と情報発信

１．新たなイメージ像の構築

２．情報発信

Ⅶ　その他

１．多様性の尊重

あとがき

Ⅷ　資料

１．みなまた地域創生ビジョン研究会関係

２．水俣フューチャーセッションによる市民のアイデア

３．全国の参考事例の紹介

４．参考文献等、その他

Ⅰ　みなまた地域の創生に向けて「健康」に焦点をあてることの意義

（次世代に引き継がれる健康課題）

第１回の研究会において、水俣市では生活習慣病の発症が多く、重症化して人工透析を受けている人の割合が国内でも高いことが報告された。とくに親世代の生活習慣は、日頃の生活を通じて子ども世代に引き継がれ、負のスパイラルとなりやすく、次世代に受け継がれてしまうことへの懸念が指摘された。ここに、世代にかかわらず、包括的に「健康」への意識づけや健康増進を行うことが課題として見出された。

（「社会的な健康」を含む健康なまちづくりの重要性）

本研究会では、上記の課題から出発し、地域とのつながりや人間関係、生きがいなど、健全な暮らしや生活を送るうえで欠かせない「社会的な健康」にまで対象を広げて、広い意味での「健康なまちづくり」に着目した。

当地域では、いまだに水俣病の影響が続いている一方、地域社会の変化やライフスタイルの多様化が著しい中で、世代間における「人と人」との交流に焦点をあてることが「健康なまちづくり」を進めるうえで重要である。

（「３世代を育む健康なまち」へ）

具体的には、当地域では水俣病で失われた環境や健康の大切さを国内外に知らしめることがきわめて重要である。環境については、すでに「環境モデル都市」「日本の環境首都」として認められている。そこで、もう一方の「健康」について、地域創生に向けた一つのあり方として、身体的な健康や社会的な健康、次世代の健康を視野に入れて、“みんなの健康を育み、未来につないでいくまち”、言わば“いきいきタウン（いき＝育き、活き、生き）”として「３世代を育む健康なまち」について検討することとした。

II　みなまた地域の情勢

地域における健康課題

（みなまた地域における問題意識）

○　生涯を通じて概観すると、以下の点が地域の主な問題として挙げられている。妊婦の痩せがみられ、妊娠中、高血圧、蛋白尿、浮腫を呈する者が県平均を上回っている（水俣市食育推進計画 9 頁）。

（表１：妊婦の体格）

		H25
BMI 18.5未満	数	37
	割合	20.0
BMI18.5～24.9	数	132
	割合	71.4
BMI25以上	数	16
	割合	8.6

母子健康手帳交付時の生活習慣聞き取り結果より集計

（表４：妊娠３０～３１週の妊婦健診結果）

			H21	H22	H23	H24
受診者数			172	174	198	190
内訳	異常なし	数	77	78	97	79
		割合	44.8	44.8	49.0	41.6
		県	50.2	48.1	51.3	51.7
	要指導	数	12	16	16	4
		割合	7.0	9.2	8.1	2.1
		県	12.3	12.3	14.2	13.4
	要治療	数	83	80	85	107
		割合	48.3	46.0	42.9	56.3
		県	37.6	39.6	34.5	34.3
要指導・要治療の内容	高血圧 たん白尿 浮腫	数	9	14	18	24
		割合	5.2	8.0	9.1	12.6
		県	5.9	6.3	6.8	7.5
	貧血	数	92	80	84	107
		割合	53.5	46.0	42.4	56.3
		県	45.0	46.1	43.0	44.0
	その他	数	9	12	3	5
		割合	5.2	6.9	1.5	2.6
		県	8.5	9.4	9.4	8.7

母子保健事業報告より

○　子どもについては、小学生から中学生の全ての学年において肥満傾向が県平均・全国平均を上回っている（水俣市健康増進計画 41 頁、水俣市食育推進計画 38 頁）。「食生活、運動習慣等を起因とする生活習慣病の予防は、子ども世代から健康に関する正しい知識の普及啓発を図り、自己や家族の健康管理の必要性を理解してもらうことが重要」（水俣市ひまわりプラン 23 頁）、「子ども自身が自ら食品を選択するか、料理する力を育てていくことも必要」（水俣市食育計画 14 頁）と述べられている。

○ 国民健康保険の「被保険者の 77.3%が生活習慣病で受診しており、中でも高額な医療費と個人の生活の質の低下をまねく、虚血性疾患・脳梗塞・脳出血・人工透析の受診割合は県下で一番多い状況です。また、高血圧、脂質異常症の受診は県下14市の中で1位、糖尿病は 2 位、高尿酸血症は 4 位」と述べられている（水俣市健康増進計画 10 頁）。

○ 特に、熊本県は人工透析を受けている人の割合が全国で 2 番目に高いが、水俣市は県内で最も高い（水俣市健康増進計画 34 頁）。

（表1）

①都道府県別人工透析患者数の推移（上位10位）

順位	平成20年度			平成21年度			平成22年度		
	都道府県	患者数	人口100万対	都道府県	患者数	人口100万対	都道府県	患者数	人口100万対
1	宮崎	3,557	3,131	徳島	2,534	3,212	熊本	5,908	3,251
2	熊本	5,656	3,106	熊本	5,825	3,211	徳島	2,503	3,187
3	徳島	2,464	3,103	大分	3,705	3,100	宮崎	3,611	3,181
4	大分	3,529	2,941	宮崎	3,443	3,042	大分	3,760	3,142
5	沖縄	4,001	2,908	沖縄	4,012	2,903	沖縄	4,095	2,940
6	高知	2,119	2,741	鹿児島	4,903	2,871	高知	2,230	2,917
7	鹿児島	4,614	2,687	高知	2,175	2,839	鹿児島	4,786	2,805
8	和歌山	2,664	2,632	和歌山	2,727	2,716	栃木	5,494	2,736
9	栃木	5,182	2,577	栃木	5,326	2,655	和歌山	2,710	2,704
10	福岡	12,670	2,507	長崎	3,716	2,599	長崎	3,781	2,650

※わが国の慢性透析療法の現状（社）日本透析医学会 統計調査委員会
人口 100万対の総人口は2010年国勢調査より

②県内市町村別国保における人工透析件数割合の推移（上位10位）

順位	平成20年度			平成21年度			平成22年度			平成23年度		
	市町村名	透析件数	件数割合	市町村名	透析件数	件数割合	市町村名	透析件数	件数割合	市町村名	透析件数	件数割合
1	水俣市	62	0.77	津奈木町	11	0.64	水俣市	48	0.54	水俣市	49	0.62
2	天草市	155	0.45	水俣市	50	0.62	人吉市	62	0.51	水上村	5	0.58
3	人吉市	50	0.44	山江村	6	0.49	山江村	6	0.46	山江村	6	0.51
4	宇城市	89	0.43	阿蘇市	44	0.47	荒尾市	82	0.46	天草市	157	0.49
5	富合町	11	0.42	苓北町	12	0.44	宇城市	102	0.45	錦町	17	0.48
6	山江村	5	0.40	宇土市	51	0.43	天草市	153	0.42	あさぎり町	26	0.47
7	阿蘇市	37	0.39	人吉市	47	0.42	上天草市	54	0.42	菊池市	79	0.46
8	熊本市	705	0.38	天草市	145	0.42	あさぎり町	25	0.39	宇城市	89	0.43
9	荒尾市	60	0.37	あさぎり町	25	0.42	宇土市	51	0.39	人吉市	46	0.43
10	南阿蘇村	15	0.36	錦町	15	0.42	錦町	15	0.39	宇土市	50	0.42

※「国保医療費の疾病分類別統計状況」より
各年度5月診療分（0歳～74歳）

○「医療保険者による特定健康診査・特定保健指導は、平成 22 年度の法定報告で、受診率 22.0%（県下 44 位）、保健指導実施率は 17.7%で非常に低い状況です。」と述べられている（水俣市健康増進計画 12 頁）。

○ 成人期の食生活では、「脂質や食塩の過剰摂取、食事のバランスの悪さ、外食等の利用によるエネルギー過剰、野菜不足の実態」が指摘され、「栄養必要量に関する知識の普及啓発」が施策の方向性として挙げられている（水俣市食育推進計画 19 頁）。

○ 水俣市は国、県の実態に比較し、高齢者世帯が多く、高齢者の一人暮らし、高齢者夫婦の世帯も多い。また高齢者の痩せの傾向が続いており、高血圧、HbA1c 脂質異常等の要指導の対象も多い。「良好な血圧、血糖のコントロール方法や、個人に合わせた栄養バランス等、生活習慣病重症化予防のための自己管理について、今後も継続した支援が必要」と述べられている（水俣市食育推進計画 20、21 頁）。

高齢者健診有所見者の状況（65歳以上）

年度	受診者数	BMI				収縮期血圧		拡張期血圧	
		18.5未満	割合	25以上	割合	140以上	割合	90以上	割合
H20	1131	86	7.6%	229	20.2%	632	55.9%	222	19.6%
H21	1091	77	7.1%	229	21.0%	584	53.5%	192	17.6%
H22	1044	78	7.5%	206	19.7%	553	53.0%	191	18.3%
H23	1012	79	7.8%	190	18.8%	393	38.8%	176	17.4%
H24	983	86	8.7%	180	18.3%	382	38.9%	161	16.4%
H25	1011	94	9.3%	172	17.0%	408	40.4%	152	15.0%

年度	受診者数	血糖値		HbA1c		中性脂肪		LDL	
		100↑・140↑	割合	5.2以上	割合	150以上	割合	120以上	割合
H20	1131	482	42.6%	440	38.9%	141	12.5%	550	48.6%
H21	1091	415	38.0%	500	45.8%	143	13.1%	510	46.7%
H22	1044	381	36.5%	669	64.1%	100	9.6%	484	46.4%
H23	1012	327	32.3%	615	60.8%	104	10.3%	388	38.3%
H24	983	277	28.2%	461	46.9%	99	10.1%	399	40.6%
H25	1011	299	29.6%	467	46.2%	120	11.9%	449	44.4%

H25－5.6以上

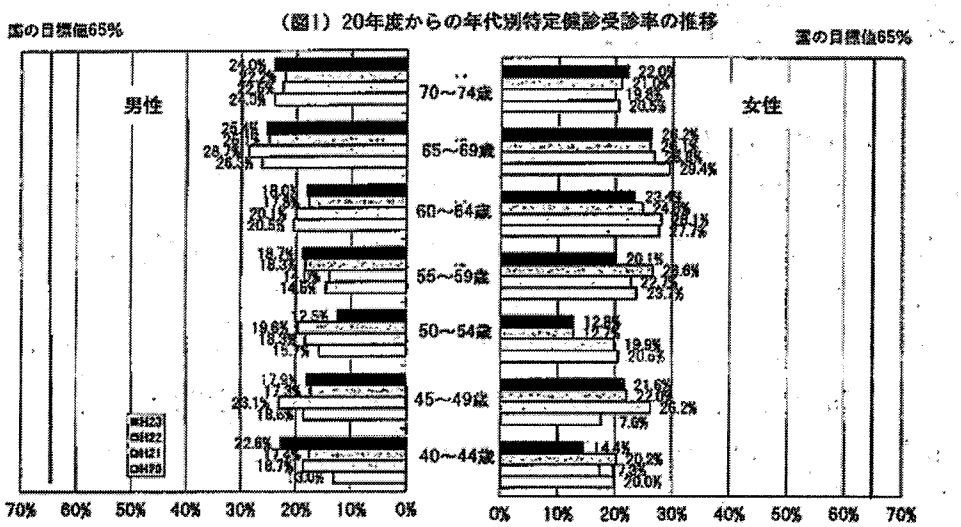
○ 介護保険の認定者数は、平成 23 年度には 1800 人台を超え、県内 14 市中でも 3 番目に多い（水俣市健康増進計画 9 頁）。

	H21	H22	H23	H24	H25	H26
認定率	19.7	20.5	21.6	22	21.9	22
合計	1720	1792	1861	1941	1969	2009
第2号被保険者	35	38	46	48	54	57
要介護5	216	243	243	236	236	231
要介護4	211	224	230	219	222	222
要介護3	199	197	216	241	255	269
要介護2	220	261	268	262	247	218
要介護1	353	376	379	375	384	397
要支援2	154	213	206	231	209	213
要支援1	332	240	273	329	362	402

※平成21～平成23は９月末現在。平成24以降は推計。（単位：人）

（表８）　平成20～23年度の健診受診者内訳

	受診者数（下段:受診率） A	Aのうち次年度健診対象者 B	継続受診者（前年度の受診あり）	新規受診者	新規受診者 C	不定期受診者 D	74歳受診者 E
H20	1,328 23.0%	1,274 95.9%			—	—	54 4.1%
H21	1,311 23.1%	1,248 95.2%	899	412	412 31.4%	14 3.4%	63 4.8%
H22	1,224 22.2%	1,167 95.3%	990	234	234 19.1%	9 3.8%	110 9.0%	57 4.7%
H23	1,211 22.0%	1,148 94.8%	849	222	222 18.3%	7 3.2%	140 11.6%	63 5.2%



出典:水俣市健康増進計画 28 頁より転載

（みなまた地域の課題）

○ 以上の状況をもとにすると、みなまた地域では、多世代において健康状態に改善を要する点、特に生活習慣に起因する疾病（高血圧、糖尿病等）に係る日常生活の変容が強く求められるものと考えられる。これは成人のみでなく、親世代の生活習慣は、子ども世代に引き継がれ、負のスパイラルとなり次世代に受け継がれてしまうことから、世代を問わず包括的に健康増進を行うことを可能とする必要がある。また高齢化が国、県に比しても急速に進んでおり、認知症の予防も含めた対策の必要性が課題として見出される。

地域で求められていること

（次世代を育む場としての地域）

○ 子育て中の親には、地域で相談できる者がいなかったり、子育てに不安を持っている者も多く、子どもが生まれ、育つ場としての地域がその機能を十分には果たしていない状況にある。子ども、親世代、高齢者が協働の上で、次世代を育む場として地域社会を創生することが強く求められる。

（未来に向けた市民の声・アイデア）

○ ママさんの声として、おじいちゃん、おばあちゃんにかわいがってもらい、その経験を抱いて成長し、大人になっても覚えておいてほしい。

○ 団塊の世代が７５歳以上となる２０２５年（平成３７年）以降は、多くの人がリタイヤする。特に、リタイヤ後の男性には生きがいや居場所が必要。

○ 今後、団塊の世代がリタイヤし、職域を中心とした生活から地域を中心とした生活を送る者が急増してくる。今まで仕事を通じて得てきた充実感や達成感が、地域活動に向けられるケースもでてくるであろう。

Ⅲ 検討の視点とめざす方向性

検討の視点

（複雑化する支援ニーズ）

○ これまで福祉サービスは、高齢者、児童、障がい者など対象者ごとに発展してきたが、高齢者施策については、2025 年（平成 37 年）を目途に、医療や介護、福祉サービスを含めた様々な生活支援サービスを日常生活の場で提供することにより、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるように、地域の包括的な支援・サービスの提供体制（地域包括ケアシステム）の構築が進められている。

○ その一方で、共働き世帯の増加や高齢者の増加により、子育てや介護の支援がこれまで以上に必要となる中、介護や子育て支援・生活困窮等の様々な分野において、家族内又は地域内の支援力が低下しているという状況がある。さらに、世帯単位で複数分野の課題を抱えるといった状況もみられる。

（共に支え合う地域実現の必要性）

○ こうした課題に対して、地域全体で支える力を再構築することが求められる。同時に支援のあり方としても、複数の分野を包括的に行うことを可能とすることが必要となっている。

○ 今まで以上に、高齢者、障がい者、児童、生活困窮者等、すべての人が世代やその背景を問わずに共に活き活きと生活を送ることができ、さらに地域の人々が集まる機会が増えて、地域のコミュニティが活発に活動できる社会の実現が期待される。そして、この共生社会を実現するためのまちづくりが地域において求められる。

○ 隣近所の人が閑散としていく中で、この共生社会を実現するためのまちづくりの方法は、これまでのように個々の問題をそれぞれ解決するよりも、すべての市民

に関わる問題に対して底上げを図る方が、共に支え合う地域の実現には効果的と思われる。

○ 第Ⅱ章で述べた課題を解決するためには、すべての人が世代や背景を問わず、安心して暮らし続けられるまちづくりとして、多世代・多分野対象型の地域包括支援が不可欠である。これを実現するためには、複数分野の問題や複雑に絡む問題を抱える対象者や世代に対し、分野横断的かつ包括的な支援が求められる。

○ 地域の実情に見合った支援体制にするために、地域の支援ニーズの現状・将来的変動、人口の状況、まちづくりの方針等を踏まえ、地域の実情に合った体制を整えることを可能にすることが肝要である。このため、複数分野の支援を総合的に提供する方法を検討する。これは、日常生活の中で誰もが集い、支え合う場の形成として、住民が主役になるまちづくりの取組みになる。

みなまた地域でめざす方向性

○ 水俣市は、環境については、既に「日本の環境首都」や「環境モデル都市」として施策が進められており、効果が挙げられてきている。他方、健康については、生活習慣病の発症が著しく、人工透析を受けている人の割合が国内でも非常に高いことなどの多くの課題が報告された（第1回）。

○ そこで、本研究会では、地域とのつながり、人間関係、生きがいまで広げて、広い意味での「健康」を大くくりのテーマとすることとした。

○ また、2013 年の水俣条約外交会議により、世界に共有された「水俣」の地名を、「内外における公害の再発防止」や地域の振興に活用していくことが課題として認識された。

○ 大人の生活習慣病など地域における問題意識をもとに、国水研がみなまた地域において実施しているフューチャーセッションで引き出された「健康なまちづくり」に関する様々なアイデアをまとめて捉えた結果、子ども・親世代・高齢者の「交流」が、みなまた地域でめざす方向性のキーワードとして見出された。

○ そして推論として、子ども・親世代・高齢者の「交流」は、みんなにいい（健康面での相乗効果があるだろう）ということから、みなまた地域の既存の交流の機会を生かしつつ、さらなる交流の機会を創出し、またみなまた地域ならではの内容も考慮した世代間交流の発展により、「３世代を育む健康なまちを育む」ことをめざすこととした。

Ⅳ　みなまた地域でめざす地域社会像の構築

3世代育み健やかタウン

（コンセプト）

○　水俣市は、日頃からの交流により、3世代が幸せを実感しながら、みんなの健康（身体的・精神的・社会的な健康）をより良く育み、未来につないでいくまちをめざす。

○　そのため、子どもや親世代がすこやかに成長し、高齢者がいきいきと充実した日々を送れるように、多種多様な交流の場を設け、楽しみながら健康を増進できるようにする。

（ビジョン）

○　多種多様な交流が日頃から重ねられ、それぞれの世代の課題の解消に取組むとともに、楽しみながら健康を増進している姿がみられる。そして子どもや親世代がすこやかに成長し、高齢者がいきいきと充実した日々を過ごしている。

○　これらの取組みを続けることにより、3世代が幸せを実感しながら、みんなの健康をより良く育み、未来につないでいく健やかなまちになっている。また、水俣病の教訓から「環境」と「健康」の両面に優れたまちを創りだしている市民の笑顔がこぼれている。

○　環境被害を受けたまちの先駆けとして、まちの魅力や市民による活動を子ども世代につなぎ、国内外に広く伝えている。

用語の定義

○　3世代

3世代とは、胎児～高齢者まで、すべてのライフステージを対象とし、子ども・親世代・高齢者の3つに大別する。3世代というのは、現在の3世代とともに、未来の世代にもつないでいくという意味がある。

○ 育み

育みとは、子ども・親世代・高齢者が「交流」による相乗効果により、それぞれの課題（たとえば低出生体重児、子どもの肥満、生活習慣病など）の解消を図りつつ、健康（身体的・精神的・社会的な健康）を増進していること。

○ 健やかタウン

健やかタウンとは、顔の見えるコンパクトな環境のまちで、3世代の育みにより、幸せを実感しながら、みんなの健康（身体的・精神的・社会的な健康）を未来につないでいくまちをいう。

○ 健康

健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいう（日本 WHO 協会訳）。

○ 多種多様

多種多様とは、数や種類が多いさま、バラエティに富む状態をいい、水俣市民をはじめ、周辺の市や町、国外からの研修生や留学生などにも開かれた交流がフレキシブルに行われることをいう。

○ 交流の場（マッチングポイント）

交流の場とは、3世代の人たちが互いに行き来し、さまざまな物事のやりとりが行われる場をいう。水俣市内のあちこちに、水俣にあるもの（場、人、しくみ）を活かして、多種多様に設けられ、曜日や時間、内容が様々に用意されていて、コンビニのように好きな所をいつでも気軽に利用するイメージ。このような場を、交流の場（マッチングポイント）と称する。

V　3世代育み健やかタウンを推進するための方策

マッチングポイントの設定

（マッチングポイントの創出）

○　マッチングポイントの候補として次の場が考えられる。

・遊び場：広場、公園、子どもセンター、保育園、幼稚園など

・ふれあいの場：デイサービス、地域リビング、本よみ場、茶のみ場、もやい館、ふれあいセンター、愛林館、理美容室、公民館など

・田舎体験予備校（愛林館、村丸ごと生活博物館など）

・各種イベント（もやい音楽祭、まちゼミなど）

・その他：ごみの分別の場など

・自主的な会の場（主夫・主婦向けの会、夢語り8コマ劇場）

→フューチャーセッションでのアイデア

○　市独自の制度として、すでに「環境マイスター」、村丸ごと生活博物館における「生活学芸員」「生活職人」といった創意工夫がなされているので、これらを拡充することも検討する。

○　水俣における特色として、老人ホーム＋保育園や、定期健診に来た高齢者＋幼稚園といった場を活かすことが考えられる。

（マッチングポイントでの交流のねらい）

多くの関わりの中で、「交流のねらい」として次のことを重視する。

○　子ども

楽しく遊びながら、地域での実体験や思い出を重ねて、すこやかに成長できるようにすること。

○　親世代

子育てや健康について情報交換をしながら、次世代をすこやかに育むとともに、自らの健康を意識するようになり、健康増進にも努めるようにすること。

○ 高齢者

自らの健康に配慮しつつ、知識や技能、趣味などを活かして居場所や生きがいを発見し、いきいきと充実した日々をおくれるようにすること。

（マッチングポイントの工夫例）

（1）遊び場に関して 市に登録した遊びコーディネーターや見守り隊の配置 関係者の名札・バッチ着用 地区ごと遊び場マップ作成 遊びの種類、コーディネーターのいる時間の明示 情報をスマートフォンで検索可能化
（2）ふれあいの場に関して 参加者が教えあいながら各種活動を実施（手工芸品（コースターなど）の作成、童謡の歌唱、紙芝居など） 手工芸品の陳列展示、お土産 家族、友人などへの口コミでの情報提供による参加者拡大

マッチングポイントが機能するための課題及び対応策

（当面の実施にあたり必要なこと）

○ 基本的なルールを策定する。

例えば、愛知県高浜市では、健康自生地の認定要綱を定めている。この要綱では、健康自生地の定義や認定要件、認定申請、書式等が決められている。このように必要最小限のルールを定めておくことで、地域のなかで望ましいと考えられる行動が選択され、問題発生の予防につながることが期待される。

そこで、マッチングポイントの要件として、多世代の自発的な交流により、子どもがすこやかに成長でき、親世代が健康を意識するようになり、高齢者がいきいきと充実できる場であることを定めておく。

また、市民の創意工夫により運営していくこと、認定等の書式や、活動内容の把握方法についても予め定めておく。

○ 交流のメニューを考えて地域の健康づくりにかかるモデル的なプログラムを作成する。

特にみなまた地域ならではの特長を活用する。みなまた地域の特色を活かしたマッチングポイントのアイデアを、フューチャーセッションで多世代から引き出す。

地域の自然財産を活かした遊びを、やったことのある世代から聞き取る。

あるもの（場・人・しくみ）をマッチングポイントとして活用することにより、活動資金を抑えることが可能になる。

○ スタートアップ支援を行なう。

利用者や事業者に分かりやすいモデル的なポイントをつくる。

必要な予算を確保する（愛知県高浜市の健康自生地では1か所数万円程度の予算を市が準備し、後押しをした。）。

市は、情報発信とインセンティブを与えることを行う。例えば、情報紙を作成し、市の広報紙に折込んで全戸に配布することが考えられる。

○ リーダーや担い手を確保する。

安定的かつ継続的な地域健康福祉活動には活動の核となる人材が必要である。

リーダーや担い手は、すでに様々な活動をしている人を活かす。例えば、OB 教員生徒会役員、地域活動者、ボランティア等で、PTA や青少年団体などに限らず他の様々な分野に見いだしていくことも必要である。

担い手は、参加者のなかからみつける。多趣味な人や特技のある人に、担い手になることを促す。担い手にもポイントなどのメリットを導入する。

○ すべての参加者がその気になるための方策を考慮する。

ポイント付与やスタンプ押印を行う。

中高生に企画段階から入ってもらう。

飲食店をはじめている人や各種団体に入ってもらう。

特に子どもが参加したくなるものにするため、子どもにとって、楽しく、おもしろいものを企画する。

○ 長期に渡る継続に留意する。

高校や中学校の授業やプロジェクトの一環として行えるようにする。

高校生が主体的に活動するマッチングポイントを設ける。

スタンプラリーや歩数計をつけてもらい、マッチングポイントに行くと スタンプがもらえるようにする（愛知県高浜市の健康自生地の例では、30 個スタンプがたまると応募でき、抽選で景品が当たるようにしている。なお、景品は、すべて協賛の商店や企業からの寄付で集めている。）。

○ 主役の市民を市が後押しする。

市は、情報発信とインセンティブを向上させるために予算措置を検討する。

公的な健康福祉サービスとうまくつながるよう、公的な健康福祉サービスの見直しや運用の弾力化が必要。

住民の自主的な交流基盤を設けるため、健康増進計画、食育推進計画、地域福祉計画等に新たな支え合いの場として位置づける。

マッチングポイントに向けての情報発信を行う。健康にかかる有益な情報、世代間交流の効率的な活動にかかる情報、それらを生かしたプログラムメニューなどを提供し、共有を図る。

（マッチングポイント間の相乗効果を考える）

○・・・を巡るコースのようなルートマップを作成する。

Ⅵ　新たなイメージ像と情報発信

新たなイメージ像の構築

○ 既存のイメージ像

当地域では、水俣病で失われた環境や健康の大切さを国内外に知らしめることがきわめて重要である。これまで「水俣病の水俣」「環境モデル都市」「水俣条約の水俣」といったイメージが重ねられてきた。ただし、「健康」については、全市民的な取組みには至っていない。

○ 新たなイメージ像

そこで、地域創生に向けた一つのあり方として、身体的な健康や社会的な健康、次世代の健康を視野に入れて、“みんなの健康を育み、未来につないでいくまち”をめざすこととした。

そして将来、市民が自発的に世代を超えた健康まちづくりを拡充・深化させ、水俣病で疲弊してきた地域に対し、自ら環境と健康の両面に優れたまちとしての歩みを進めているイメージを重ねることが考えられる。

情報発信

○ マッチングポイントに向けての情報発信

リーダーや担い手に対し、活動に資する健康や他のマッチングポイントの活動状況の情報等を発信する。

○ 市民向けの情報発信

マッチングポイントにおける世代間交流の意義・内容について、定期的に情報を発信する。

○ 国内への情報発信

社会的に健康なまちへの取組みとして、「３世代を育むまち」をめざしていることを発信する。

なお、水銀による環境汚染の経験から、「環境」については、「水銀に関する水俣条約」を踏まえて、引き続き環境に関する取組みを行っていることを発信する。

○ 海外への情報発信

水俣病の教訓を踏まえて、環境と健康の大切さを世界に発信する。

Ⅶ その他

多様性の尊重

○ 子ども・親世代・高齢者の区分

○ バラエティに富む交流メニュー

あとがき

○ 本研究会では、みなまた地域の地域創生のビジョン（めざす地域社会像の一案）及びその実現方法を策定するために、国水研による市民との新たな対話の場（フューチャーセッション）で引き出された様々なアイデアを含めて検討してきた。

○ まず、当地域の情勢の把握から出発し、地域とのつながりや人間関係、生きがいまで広げて、広い意味での「健康」を大くくりのテーマとした。次に、めざす地域社会像の方向性を、「3世代を育む健康なまち」とし、これを実現させるための、3世代交流の場（マッチングポイント）を設けることを議論した。さらに、マッチングポイントにおける交流のねらいや、マッチングポイントが機能するための課題と対応策について検討してきた。

○ 健康や交流に関連する取組みについては、各委員から参考事例の紹介をしていただいた。将来、施策や事業について具体的な検討を行う時に有用になると思われるので、巻末に資料として収録する。

○ 本報告書は、多種多様な「交流」による広い意味での健康増進を、「人と人」とのつながり（もやい直し）の未来形の一つとしても捉えている。さらに、実際に取組むうえでの課題や対応策についても具体的にまとめているので、水俣市をはじめ、周辺の市や町においても実施できる汎用性を有していると思われる。

○ 本報告書が、未来思考のみなまた地域の創生に向けての一助となることを祈念する。

Ⅷ 資料

1. みなまた地域創生ビジョン研究会関係

みなまた地域創生ビジョン研究会設置要綱

1　趣旨

みなまた地域の創生への対応として、過疎地域である水俣市では、「環境を軸に街づくりを進めているが、将来の消滅可能性も指摘され、10年、20年先の未来の姿がどうあるべきか、市民も交えた議論の場を設けて施策を掘り下げたい」としている。

これを踏まえて国立水俣病総合研究センター（以下「国水研」という。）では、水俣病被害地域の地域創生に貢献するため、水俣市を支援する立場から、未来思考の政策提言をめざすこととし、2015年2月に水俣市と協定を締結した。そして「未来思考のまちづくり」について、「水俣」を冠した条約の外交会議が2013年に行われたことを踏まえ、市民との新たな対話の場（フューチャーセッション）で集めた市民の様々なアイデアを含めて、ローカルな視点から多角的に、めざす地域社会の方向性及びそれを具現化するための政策内容を検討して「地域創生のビジョン」を策定するため、「みなまた地域創生ビジョン研究会」（以下「研究会」という。）を設置する。

2　構成

(1) 研究会は、みなまた地域においてめざす方向性及びそれを具現化するための政策内容を検討し、その結果を「研究会報告書」として策定し、国水研所長に提出する。
(2) 研究会に座長をおき、委員のうちから、推薦による承認によってこれを定める。座長は、検討会の業務を総括する。
(3) 研究会に座長代理をおくことができ、委員のうちから、座長が指名する。
(4) 委員は、研究会における検討状況を踏まえて追加することができる。
(5) 研究会には、必要に応じて、検討事項に関係する者を参考人として出席させることができる。
(6) 座長に事故があるときは、座長代理が、その職務を代理する。
(7) この設置要綱に定めるもののほか、研究会の運営に必要な事項は、座長が研究会に諮って定める。

３　設置期間

研究会の設置期間は、平成27年12月18日から平成29年3月31日迄とする。

４　研究会の公開等

研究会は原則として公開で行うものとする。議事要旨は委員確認の後、公開とする。また、資料は原則として公開することとし、具体的には資料の内容に応じて座長が公開・非公開を定める。

５　庶務

研究会の庶務は、国立水俣病総合研究センター総務課が、国際・総合研究部 地域政策研究室の協力を得て処理する。

みなまた地域創生ビジョン研究会委員名簿

（50 音順、敬称略）

石原　明子　　熊本大学大学院社会文化科学研究科准教授

植木　誠　　早稲田大学パブリックサービス研究所招聘研究員

勢一　智子　　西南学院大学法学部教授

永松　俊雄　　崇城大学教授　**【座長】**

深水　陽子　　深水医院副院長

藤本　有希　　一般社団法人ハートリレープロジェクト ファウンダー

牧迫　飛雄馬　国立長寿医療研究センター老年学・社会科学研究センター
予防老年学研究部健康増進研究室長

松永　裕己　　北九州市立大学大学院マネジメント研究科教授

みなまた地域創生ビジョン研究会検討の経緯（概要）

【第1回　研究会　（平成27年12月18日（金）10:00～15:00）】

＜議題＞

・研究会の趣旨等について

・研究内容の概要について

・市民との新たな対話の場（フューチャーセッション）について

・水俣市の現状と課題について

・市内見学

【第2回　研究会　（平成28年1月22日（金）18:00～20:00）】

＜議題＞

・第１回の意見の概要報告について

・水俣・芦北地域振興計画について

・市民との新たな対話の場（フューチャーセッション）による水俣の未来像の紹介について

【第3回　研究会　（平成28年5月22日（日）12:30～14:30）】

＜議題＞

・研究会の趣旨等について

・第２回の意見の概要報告について

・めざす地域社会像の方向性について

【第4回　研究会　（平成28年7月7日（日）12:30～14:30）】

＜議題＞

・第３回の意見の概要報告について

・（仮称）３世代育み健やかタウンについて

・めざす地域社会像について

【第5回　研究会（平成28年8月1日(日) 17:30～19:30)】

＜議題＞

・第４回の意見の概要報告について

・めざす地域社会像等について

・３世代育み健やかタウンを実現するための施策について

【第6回　研究会（平成28年9月25日(日) 14:00～16:00)】

＜議題＞

・めざす地域社会像等について

・第５回の意見の概要報告について

・用語の定義について

・マッチングポイントでの交流の目標について

・目標達成のための課題及び対応策について

・研究会報告書の骨子案について

・その他

【第7回　研究会（平成28年12月11日(日) 14:00～17:30)】

＜議題＞

・めざす地域社会像等について

・第６回の意見の概要報告について

・マッチングポイントにおける交流のねらいについて

・マッチングポイントが機能するための課題及び対応策について

・新たなイメージ像と情報発信について

・研究会報告書の骨子案について

・研究会報告書の素案について

・その他

【第8回　研究会（平成29年　　月　　日（　）★）】

＜議題＞

・

（備考）

各回の資料、参考資料及び議事録については、環境省国立水俣病総合研究センターのホームページに掲載されています。

http://www.nimd.go.jp/kokusui/vision.html

２．水俣フューチャーセッションによる市民のアイデア

遊び場での交流

【　概要　】

水俣市内では子どもたちだけで通える公園や広場が少ないと言われている。そこで、「遊びコーディネーター」や「地域見守り隊」を配置し、子どもたちに遊び場を、シニアに生きがいをもってもらい多世代の交流の場となるアイデア。

■遊びコーディネーター

「環境マイスター」のような、生活に直結した料理や遊びを教えてくれる人たちを「遊びマイスター」に認定し、公園や広場に配置する。配置されたマイスターがイベント（料理教室や竹とんぼづくりなど）を開催し、そこに子どもたちが遊びに来る。

学校や回覧板などで、いつどこでどんなイベントが行われるか書いてある「遊び場マップ」を配布し、周知する。

リタイアした人たちにとってマイスターに認定してもらうという目標をもつことや、子どもたちとふれあえることで、やる気や生きがいにつながっていく。子どもたちにとっても遊び場ができ、たくさんの人たちと接することによってルールやコミュニケーション能力の向上へとつながる。

■地域見守り隊

公園や広場で遊ぶ子どもたちを見守ってくれる人たちのこと。主にリタイアした人や近所の人たちが集まって見守ってくれる。身元がはっきりわかるように登録制にし、活動中はワッペンを着用する。

大人が見守ってくれることによって、子どもたちは思いっきり遊ぶことができ、親も安心して遊ばせることができる。

見守り隊になることで、リタイヤした人たちに役割を持ってもらえる。さらに顔見知りになることで防犯にもなる。

【　候補地　】

公園、広場、子どもセンター、保育園、幼稚園など

ふれあいの場での交流

【　概要　】

水俣市各所に既存するデイサービスや美容室などを交流スペースとして利用する。高齢者と子どもたちが日常的にふれあう機会になる。高齢者にとっては子どもとふれあうことで良い刺激となり、子どもたちにとっては高齢者と会話をすることで敬語や接し方を身に付ける場にもなる、というアイデア。

■いその家

デイサービスを高齢者だけでなく、子どもたち（乳幼児も可）やその親が利用することができる。デイサービスで行われるレクリエーション（体操やものづくり）を高齢者と共に、親子で参加することもできる。小さい子どもだけでなく、学生たちが出向き、昔の遊びを教えてもらったり、ボランティアとしてできる仕事を手伝うこともできる。手伝うことによって交流が増える。

また、ご飯もみんなで一緒に食べることができる。ご飯を食べることによって、家庭との味付けの違い（薄味、濃味など）がわかり、食の見直しにもつながる。

子ども、親、高齢者世代との交流が図れる。

■ウチこんね

美容室が交流スペースとしても利用できる。地域の人（近所の高齢者や学校帰りの子どもたち）などが集まり、会話や昔ながらの遊び（ボードゲームなど）を楽しむことができる。そういったコミュニケーションをとることで、高齢者の生きがいとなる。子どもたちにとっても多くの世代と関わることができる。（コミュニケーション能力の向上）また、顔見知りとなり、防犯や災害時、認知症徘徊の防止につながる。

【候補地】

デイサービス、地域リビング、本読み場、茶のみ場、もやい館、ふれあいセンター、理美容室、公民館

自主的な会の場での交流

【　概要　】

子育て世代や多世代を対象とした交流の場。市民が自主的に会を開き、集まる。子育て世代には悩みや相談する場だけでなく、情報交換や子どもたちの交流、さらに子育てを終えた年配層やリタイヤした人たちにも活躍できる場を設け、役割や生きがいをもってもらえる場となる、というアイデア。

■ふ・ふ会

子育て中の悩みや相談を１人で抱えてしまうこともあるので、抱え込まないように子育て世代を対象とした交流の場。対象は子育て世代だが、会に参加する人の年齢など制限は特にない。月に１回程度、テーマを決めて無理なく開催し、子育てを終えたベテラン主夫・婦を講師として呼んだり、子育てに関する悩みや相談ができる。短時間ではあるが、ベテラン主夫・婦チームがベビーシッターとして子どもを預けることも可能。子育て世代、子ども、子育てを終えた世代との交流が図れる。

■夢語り場８コマ劇場

夢を持っている人が目標を立て、その目標へ向かうためのプロセスを８コマ、パソコンや紙に書いて作り、作った８コマを集まった人たちへプレゼンのように発表する。そのプレゼンを聞いた人たちが興味を示したり、賛同する人がいたら支援してもらったりビジネスパートナーになることもできる。そうすることで夢に近付くことができる。

聴きに来た人も、できることから役割をもてるので意欲的になる。また、人の夢を聴くことで自分の夢も見つけることができるかもしれない。

学生からリタイヤした年代まで、様々な人たちが集まり交流の場になる。

【　候補　】

ふ・ふ会、夢語り場８コマ劇場

いなか体験予備校

【概要】

子どもたちが自然とふれあえる機会が減った水俣市山間部を活用した交流イベント。山間部の生活の体験を通して、多世代の交流が図れる、というアイデア。

■いなか予備校

子どもたちが自然とふれあう体験を通して健やかになり、自分で道具を作ったり、考える力が身に付けられる。また、子育ての悩みをあまり相談しないといわれる父親が参加することによって、同じ世代の子育ての悩みを話したり情報交換したりすることで「パパ友」を作ることができる。

山間部の伝統料理を学ぶこともでき、料理を通じて会話やコミュニケーションが図れる。伝統料理も後世へと伝えることができる。

各種イベント

【　概要　】

自分が住むまちに愛着が沸くと、離れがたくなるのではないかということから、水俣に愛着を持ってもらえるよう若者が帰ってくる帰省時期にイベントを開催し、そのイベントを通して、水俣の良さを知ってもらう。またイベントを開くことによってたくさんの人が交流できる場となるアイデア。

■かぁちゃん味自慢大会

帰省時期（夏、冬）にもやい館で開催する。イベントの内容は料理を披露する。ただ料理を披露するのではなく、美味しいと思う、違う家のお母さんの味を推薦し、他の人に教える。

大きなイベントだけでなく、地域の行事や公民館に集まった時などに、おかずをそれぞれ持ち寄ってシェアしたりもする。

水俣の郷土料理の素晴らしさを再認識してもらい、イベントを通じて様々な年代が集い交流できる場となる。

【　候補　】
もやい音楽祭、まちゼミ

その他

【概要】
公園とまではいかないが、川原や市内の空きスペースを休憩スポットとして使いたいという声があった。そこで、水俣市内にある空きスペースや公園、広場などを利用して交流スポット・ゾーンを設置する、というアイデアが生まれた。

■一期一会の交流BOX
公園そのものをオープンカフェにして、近隣のお得な情報を発信する広場。カフェ内には多言語サポートゾーンがあるので、海外の人ともコミュニケーションをとることができる。公園内だけでなく、市内のちょっとした空きスペースにもミニ掲示板やベンチがあり、誰でも休憩できるようになっている。
また、水俣市内、近隣で撮った風景や出会った人々などをネット上にアップし、共有することができるフォトスポット掲示板がある。
カフェ広場や休憩スポットで地域の人や県内外の人たちと情報交換や会話ができ、海外の人たちとも交流ができる場になる。

3. 全国の参考事例の紹介

全国高校生マイプロジェクトアワード（松永委員）

高校生が、地域や社会の課題を自分事として捉え、その解決に少しでも貢献できるようなプロジェクトを自分で企画して実施するという内容。

＊　水俣で実施する場合、どんな形が考えられるか

① そのままやるとすると、それを担う主体はどこなのという話が当然出てくるが、高校生が、主体的に自分たちのまちを発見する企画はできるのではないか。

（例）　・水俣市内の高校や中学校の授業やプロジェクトの一環としてやる。

・マッチングポイントの使い方を高校生に考えてもらう。

② どう使いたいのか、どう使ったら効果的と思うのかという企画の検討から関わらせることで主体性が出てくるのではないか。

【　概要　】

高校生が、地域や社会の課題を自分事として捉え、その解決に貢献できるようなプロジェクトを自分たちで企画して実施する。

①全国４カ所で２泊３日の合宿をやって、そこで企画をつくる。

②地域に帰って３カ月ほどアクションを起こす。

③その結果をまとめ、書類選考→地域大会／オンライン大会→全国大会を行う。

■部門

・学校部門

学校の授業や課題研究、部活動等の活動を通して行ったプロジェクト

・個人・グループ部門

高校生が主体、学校内・外で自発的に課題設定を行い活動したプロジェクト

■評価基準

プランの壮大さを比べるものではなく、次のアクションにつながる学びを評価。

※参考※ 評価基準の６つの要素

単純に全ての項目をバランス良く満たしているため評価をするというわけではなく、他の高校生のロールモデルとなりうるマイプロジェクトを評価。）

①自発性　（当事者意識）

・主体的な意志判断を行い、自分なりの信念を持って取り組むことができたか

・誰かのせいにすることなく起きている社会課題をジブンゴトとして捉えることができたか

②活動実績　（実践/プラクティス）

・具体的にどんな行動を起こったのか/行ったことでどんな成果があったか

・どんなインパクトを残したのか

③必要性（テーマの探求）

・「地域や社会（その取り組みを必要と感じる自分以外の他者）」にとっても、重要な課題なのか

④創造性（クリエイティビティ）

・既存のやり方に縛られない新しい取り組みか/着眼した 点は新しいか

・他の日本の抱える課題解決に生かせるものか

・楽しい、面白いなど周りの人のポジティブな気持ちを引き出すものであるか

⑤協働性

・単独での取り組みではなく、多様な人たちと協働を試行錯誤してきたか

⑥共感性

・様々な人の共感を引き出せるメッセージの発信、行動を行うことができたか

島前高校魅力化プロジェクト（松永委員）

島根県の海士町：少子化のため、全国から国内留学を呼び寄せようというプロジェクト。

＊　水俣で実施する場合、どんな形が考えられるか

【松永委員】

・子供たちが地域のことを発見できるような仕掛けを作る。

・自分の地域の中にずっといると気づかないことがたくさんあるので、アカデミアに来た大学生や高校生、外から来た人と交流をするポイントを作る。

・水俣高校もスーパーグローバルハイスクールなので、単に調べただけではなく、海外で英語で発表する場や交流する場も設けてみてはどうか。

【　概要　】

少子化のため、全国から国内留学を呼び寄せようというプロジェクト。

島根県の沖ノ島の小さな四つの島のうちの一つ、海士町にある唯一の高校。

町が塾をつくって勉強を教え、勉強を教えるだけではなく、地域のいろいろな課題を自分たちで見つけ、それについて学習し解決策を考えるということをやっている。

島に生まれてずっと島で育った子供と外からやってきた子供がまじり合っていく中で、新たな発見をしている。

いなか留学として成功している例として全国的に有名で、モデルケースになっている。

■普通科コース制・総合選択制を導入し、2コースを設置

・特進コース

国公立大学への進学に対応。

（　進学先一例　）

茨城大学・金沢大学・和歌山大学・島根大学・高知大学・鳥取環境大学・島根県立大学・山口県立大学・慶応義塾大学・早稲田大学・大阪芸術大学・京都造形芸術大学他

・地域創造コース

専門学校や就職など大学進学以外の多様なニーズに対応。

・一人ひとりのニーズに合わせたインターンシップ
・（地元の企業や施設などでの職業体験）
・地域に根ざす人材を育てる地元学
・総合力を 高める課題解決型学習
・地域の人材や資源を活かした実習や演習

ダイビングなどの資格が取れるようにする講座の開設も検討。

島前の地域資源を活かした専攻科、専門学校の設置も検討。

■町営の寮を活用した、多様な交流の機会の提供

■スーパーグローバルハイスクールに選定

国への研修旅行や、フランスからのサマースクールなどの交流もあり。

《例》 2年生全員がシンガポールの大学にて、英語でのプレゼンや質疑応答を行った。

※水俣高校もスーパーグローバルハイスクールに選定。

たかはま元気 de ねっと（健康自生地）（牧迫委員）

愛知県高浜市、４5,000人ぐらいの規模の市における高齢者を対象とした事業。長寿研と共同
高齢者の居場所として、市の中にたくさんのスポットを作り、市へ申請。市が健康自生地として認定するもの。

＊　水俣で実施する場合、どんな形が考えられるか

・自生地自体の予算はそれほどかかっていない。
・登録したところに、それぞれ年間で数万円ぐらいの補助金を市が出し、あとは自生地自体が独自でいろいろと運営。
・規模が結構ばらばらで、小さなカフェだけを個人で運営しているところもあれば、大型店舗の薬局の一角にそういったスペースをつくって自生地としてやっているところもある。
・民間であれば、人が来てくれるだけで経済的な波及につながる可能性もあるので、市からどっぷりお金を出してという形ではやっていない。
・効果検証に関しては我々の研究事業としてやっているので、我々のほうから結構予算立てはあるが、事業自体にはそんなに大きなお金はかけていないと聞いている。

【　概要　】

高齢者がいきいきとした生活を送ることができるように、市内各所の民間・公共施設にたくさんの交流スポット（健康自生地）を作り、地域住民が自主的・主体的に運営。

■健康自生地

1. だれでも気軽に参加できて、ほかの人とのつながりや交流を楽しめるような高齢者の方々の居場所。
2. 具体的には、市内に存在するたくさんの施設や商店、公園などで、「市民が自ら出かけたくなるような場所や地域の住民等と触れ合うことができる場所で、高浜市が認定した場所」と定義。
   《　例　》　体操の教室、趣味活動、パソコンを使う教室など
3. 市内にたくさんの「健康自生地」を設け、高齢者のみなさんに楽しく巡って健康になっていただくのが目的。

■「まちめぐりポイント」
「健康自生地」を巡って活動に参加すると、管理人からスタンプ１個（＝１まちめぐりポイント）が押してもらえる。
３０ポイント一口で応募すると、年に１回抽選で賞品が当たる。
それによってなるべくいろいろなところへ外出をしてもらおうというのが大きな趣旨。

■ホコタッチ
長寿センターとの認知症の協働研究として、「脳とからだの健康チェック」を実施し、参加者約4,000人に、ホコタッチ（専用歩行計）を配布。
各健康自生地には、ホコタッチのデータの読み取りや、参加（出席）登録を行う機械を設置し、本活動によって、本当に健康状態がよくなるのか維持されるのかという確認できるシステムを構築している。
効果については、ただ今検証中。

■運営形態
・備品購入費　３万円/自生地１件（３年度間で３万円を交付）
・運営費　年間２万円/自生地（１年度につき２万円、３年度間で６万円を交付）
・上記条件を満たしていれば、規模・設置状況は問わないため、店舗の一角にベンチを設置するだけのところもあれば、有料の専用プログラムを用意するところもある。
・自生地を運営する担い手の方々には別のボランティアポイントというものをつけて、実際に行く人とは違う形の活動としてのインセンティブ、参加するだけではなく担い手としての活動にも一つの価値をつけている。

姪浜西南大学まちプロジェクト（勢一委員）

福岡市姪浜地域の主要団体と、姪浜西南大学経済学部学生有志が協働し、「大学in地域、地域in大学」という対等な関係で学び栄える「姪浜西南大学まち」(Meinohama Seinan Univer"City")を、３カ年かけて構築する教育研究事業。

＊　水俣で実施する場合、どんな形が考えられるか

・商店街や飲食店組合等と、水俣環境アカデミア（水俣高校、提携大学など）と、連携したまちづくり。（マッチングポイントづくり）。

【　概要　】

福岡市姪浜地域の主要団体（姪浜商店街の女将さんを応援する会「あこめっこ」、姪浜商店会連合会、唐津街道姪浜まちづくり協議会等）、
姪浜西南大学経済学部（小出ゼミ生をコアとする）学生有志　の3団体が協働し、「大学 in 地域、地域 in 大学」という対等な関係で学び栄える「姪浜西南大学まち」(Meinohama Seinan Univer“City”)を、3カ年かけて構築する教育研究事業。

■取組（①は当面の目的、②と③が長期の大きな目的）

① 姪浜地域（商店街）と本学が、対等に頻繁に交流するしくみと雰囲気をつくる。
② 学生が常に社会人とコミュニケートすることにより、学生の社会力の向上を促す。
③ 学生の斬新な発想と地域との協働で、歴史と文化が豊かな姪浜地域を盛り上げる。

■本取組に向けたパイロット事業

・2015 年 2 月に有志で「姪浜商店街⇔西南学院大学イベント」を立ち上げ、SNS と広報機関を活用したファン拡大と、学生へのイベント参加募集。
・姪浜の関係者が日常の小出ゼミに出席。
・姪浜の誇る歴史的建造物である「みそ　蔵」に学生が集まってワークショップを行うなど、学生と地域との関わり方を観察している。

■M’s コミュニティー

姪浜商店会連合会と、姪浜西南大学、姪浜商店街の女将さんを応援する会「あこめっこ」で運営する地域コミュニティーセンター。

・おしゃべりカフェ（毎火曜 10 時～15時）　コーヒーとサンドイッチを用意。(300 円)
講座参加者もそうでない人も自由にゆったりコーヒー飲みながら、おしゃべりできる。
・レンタルスペースは、1時間500円で利用できる。

■イベント一例

・「第9回ワンディショップ in めいのはま」
…「あこめっこ」主催の商店街でのイベントに、西南学院大や九大生有志も出店、出演

・西南生とカフェめぐり in めいのはま
　… 懐かしい町並みが残る姪浜を彩る素敵なお店を大学生の案内でノンビリ歩く。
主催：西南学院大学教育インキュベートプログラム「姪浜西南大学まち」
共催：姪浜商店会連合会「地域資源の発掘と新たな姪浜のブランディング事業」

高校生による休耕田の復活（石原委員）

大分県で、ちょっと荒れている学校の教員の方が、その子たちの将来や社会との再統合を考えて、高齢者と高校生が一緒に休耕田を復活するようなコミュニティーをつくっていった。継続は不明。

＊　水俣で実施する場合、どんな形が考えられるか

・地域の高齢者と保育所の不足による地域の子供のケアを一体化するようなものがおもしろいのではないか。

国立保健医療科学院のプロジェクト・練馬（石原委員）

成人以上の健康増進については、行政や保健師の関与がないので、
子供に健康教育を学校で行い、学校で習ったことを帰宅後にお母さんたちに話すような、
子供から親が学ぶ健康づくりの事業。

＊　水俣で実施する場合、どんな形が考えられるか

① 水俣のアイデンティティーと誇りの復活について、子供を通じて高齢者や大人の世代に働きかけてもいいのではないか。

② 水俣発祥の地元学のプロジェクト。
　・地域の若い人と地域の外の若い人が組んで、水俣の歴史や地域のさまざまな財産を知っている高齢者や大人に聞き取りをし、地域の絵地図を作る。
　・そこから地域にある財産を使って大人と子供が一緒に商品を開発。
　・マッチングポイントの案を、大学生などの若い人も含めた水俣の中の子供と、外の子供と、水俣の大人・高齢者がやる。

4. 参考文献等、その他

・第 5 次水俣市総合計画 2010—2017
・第 5 次水俣市総合計画第 2 期基本計画 2014—2017
・第 6 次水俣・芦北地域振興計画 基本構想編
・第 6 次水俣・芦北地域振興計画 平成 28 年度実施計画編
・まち・ひと・しごと創生 水俣市人口ビジョン平成 27 年 10 月
・第 6 期水俣市高齢者福祉計画及び介護保険事業計画（ひまわりプラン）
平成 27 年 3 月
・水俣市健康増進計画　第 2 期　平成 25 年度～29 年度
・水俣市食育推進計画　平成 27 年度～29 年度